

2021年 4月 11日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教 「恵みと慈しみはいつもわたしを追う」 詩編 23編 高橋彰

【賛歌。ダビデの詩。】

- 1 主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。
2 主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い
3 魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく、わたしを正しい道に導かれる。
4 死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。
あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける。
5 わたしを苦しめる者を前にしても、あなたはわたしに食卓を整えてくださる。
わたしの頭に香油を注ぎ、わたしの杯を溢れさせてください。
6 命のある限り、恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り、生涯、そこにとどまるであろう。

聖書 新共同訳(C)日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

2021年度、関東学院教会75周年を迎えた年の主題聖句を詩編23編から選びました。人びとによく知られ、愛唱されている聖書箇所の一つで、慰めと安らぎを与えられると言われます。この詩編のメッセージを今年度わたしたちはより深く味わい、信仰生活の支えとして行きたいと思います。

詩編はヘブライ語で「テヒリーム」(賛歌)と題されます。神の民イスラエルの人びとが神を賛美し祈りをささげてきた数々の詩が長い期間(紀元前4-2世紀頃)にわたって何度かの編集作業を経て、現在の150編にまとめられたと見られています。1編ずつが独立した詩であると共に、まとまりとしての編集も見られます。口語訳には表記がありましたが、5巻の区分(1-41, 42-72, 73-89, 90-106, 107-150)になっており、それぞれ頌栄をもって終わっています。これもバビロン捕囚後の時代に律法(創世記-申命記の5巻)と祭儀を重視した人びとらの編集意図によって5巻編成にされたとも見られています。作者名であるかのように、ダビデ、コラ、アサフ、ソロモン、モーセ、ヘマン、エタンらの名前を閲した表題がついているものもありますが、敬意をこめて名を冠したものもあると見られ、個々の詩の著者や書かれた時代は明らかでないものも多いです。礼拝の場で、個々人の現実の信仰生活の場で、神に向かって祈り、求め、願い、賛美して歌った証しの言葉です。しかも神の民イスラエルの祈りと願いの独特さとして、個人の願望や利欲という「願い事」をするだけでなく、神からの離反の状態である苦しみからの救い、関係の回復、そして神の義しさが自分や世界に実現されてゆくことを求めて懇願する祈りであることが特徴だという指摘もあります。それゆえに詩編の言葉はわたしたちの祈りの言葉となり、わたしたちがどのような時と場にあっても、神に向き直らせ、新たにさせ、命を得させ、信仰を励まされる言葉として生きています。また、詩編は祈る個人と同時に神の民イスラエルの祈り、その歴史と重ね合わせて読み解くことも大事な意味があります。キリスト教会でも修道院などでは詩編の言葉で祈る習慣もあります。また、詩編は礼拝で交誦されたりもしてきました。現在、わたしたちの教会ではコロナ禍で礼拝次第を短縮して行っているために、詩編交誦を省略していますが、これも礼拝の大重要な伝統です。今年度は礼拝説教でいくつかの詩編を取り上げます。詩人たちの祈りの言葉を深く味わい、神への嘆願に心合わせ、わたしたちも神を求め、祈りを深めて行きたいと願います。

「主は羊飼い」という比喩は、神がどのようの方であり、わたしたちとどんな関係にあるかを味わい深く表現しています。聖書協会共同訳では「主は私の羊飼い」と訳出しています。この詩は一般論としての主の説明ではなく、自らの主である神と自分の関わりを表現しているのです。そしてキリスト教会は「わたしは良い羊飼い」と言われ「一匹の羊を捜し出す羊飼いの譬え」を語られたイエスを重ね合わせます。教会は詩編から救い主についての証言を聞き、また祈るイエスを見出しても来た(詩22他)のです。私には羊飼いがいる、私は羊である。だから私がどんな状況にあろうとも私の命を導く方がいるという信仰が、死の陰の谷を行くかのような現実の中で慰めになったのです。パレスチナで「青草の原(緑の野)」が見られるのはほんの一時です。桜の季節のように。ほんのひと時だけかい見られる原が、主なる羊飼いが私を導いてくれる場所だと信じてその青草に足を折り身を伏せて休息する羊の光景を思い描き、その羊のような者が私です。そうありたい、そのように導いてくださいと主なる神に懇願希求します。

「主は私の魂を生き返らせ」とあります。魂(ネフェシュ)は喉、息を表わす言葉から魂の意味に派生しています。渴きを覚えて主を慕い求めるという人間の姿、そして神に命の息を吹き込まれて生きる者とされる人間像を想起させられます。「生き返らせる」は立ち帰る(シーブ)です。預言者たちが繰り返しイスラエルの民に呼びかけた特別な言葉です。イスラエルの民は語り継いで来ました。人は神に創られ命の息を吹き込まれたのに、神から離れ、断絶し、魂=いのちが損なわれてしまった。東の地から約束の原に導かれるも飢饉で離れ、エジプトから神に導かれてたどり着いたが、神との関係が壊れ、王国は敵の手によって滅び、東の地へ捕囚となった。しかしそれでもなお立ち帰れと呼びかける声は失われない。苦難の歴史は罪を顧みてたどるものであり、鞭と杖(棍棒)で打ち叩いて導くはずの羊飼いである主のほうが叩かれ打たれて木にかけられて死なれました。しかし、その方が「悔い改めよ、神の国は近づいた」と私の魂を立ち帰らせられる。それで私は生きるのだと。イエスの復活はこのシーブにこめられた、過去を顧み、将来に立ち向かういのちに生きることです。死の陰の谷を歩む災いの中でも、恵み(トーブ)と慈しみ(ヘセド)に生きるのである。